

# 1 1. 大正初期の宿屋

## 安部時衛

※明治33年7月5日生。

私は父時平に連れられて、大正3年5月に、美幌から上藻17号に入殖しました。15才の時です。ここに三年ほど居て、大正6年に、忍路子入口（現野田のきじ飼育場）に出て来ました。その頃、五六峠越えの道路完成の直前で、忍路子入口は、上薬、滝上方面への別れ道になっていて、交通の要所でもありました。

七重に出るのには、ここで出口善兵衛さんが飲食店をしており、この人の世話で、出口さんの親類（義兄）に当る中山さんという人が、宿屋をしていた跡を引受けたのです。

宿屋は、人だけでなく、馬宿でもあり、夏は余り客はなかったが、秋から冬にかけて、雑穀の搬出が盛んで、興部方面、滝上方面からの馬で、ごった返しでした。

父は、なかなか五月蠅い人でしたので、弟（時男）と二人で夜昼なく働きました。あそこは、今も線路近くに、僅かしか水の出ない井戸が一つあるだけで、附近の人の飲み水にしか利用できず、仕方なく宿で使う水や、馬に吞ませるのを、裏の川へ、1日に何10回となく汲みに行ったか分かりません。あの時の辛かったことは、今でも忘れることができません。

宿の部屋は、八畳間が四つあって、冬は20人位も詰め込んで寝てもらい、おそく泊まる雑穀買いなどは、押入に寝てもらいました。それでも泊めてもらったということで、茶代を5円も置いた人があったが、普通行商人は、弁当をつけて1円くらいで泊めていたのだから、随分と景気も良かったものです。

あの附近には、雑穀の倉庫があり、山形団体から、小関小助さんが出て店をやったが、余り思わしくなかったようです。

私たちが入ってから、宮本さんという人が、料理屋を始めたが、壁が長い割炬で、酒を呑んだり、寝ている人が覗けるような粗末なものだったが、それでもゴケ（白首＝酌婦）が、3、4人いました。

この宮本という人は、本名が佐々木で、何か事情があって偽名を四、五年使っていたが、警察の戸口調査で、偽名とわかったそうです。そのため古い人でも、宮本が本名と思っている人が殆どでした。

そのほか、安保、北条など馬追いの人もおり、鍛冶屋などもあって、一寸した部落でした。

義達貞太郎さんが、名寄から自転車を買って押して歩いて来たのも此のころで、随分高価なものだろうと、皆で話し合ったものです。このほか、及川という巡査も自転車を持っており、小石にもあがらないように注意していました。これらが、自転車の入った最初だと思います。